

映していた知事会見「土下座メモ」は誰が作ったのか

「辞める」と激怒した 総理の「腹話術師」たち

鳩山首相の普天間問題処理は最後でミソをつけた。本誌が報じた「腹案」を抱えつつ、それに反対する平野官房長官らも温存しようとしたからだ。これが新たな波乱を呼び込んだ。

「腹案」は消えていない

5月22日の岡田克也・外相―ルース駐日米大使会談で、日米は普天間移転問題の「現行案回歸」で合意したと伝えられた。その通りならば、鳩山由紀夫・首相の敗北は明らかだ。本誌が5月21日号でスクープした

「普天間移設・鳩山腹案」に深く関わった民主党関係筋はこの日、2つの全く異なる情報に2度驚くことになった。

最初の知らせは、翌日の新聞各紙の報道と同様の内容だった。つまり、

・岡田―ルース会談で、代替滑走路は「辺野古」と決まった。
・海兵隊訓練は本土の自衛

隊基地を含めた「沖縄県外」に移転する。

・詳細の決定は6月以降。

関係筋はこのうち、後段の2項目は予想通りだったという。しかし、「辺野古」という言葉を聞いてギョツとした。

本誌がスッパ抜いた「鳩山腹案」のポイントは3つあった。

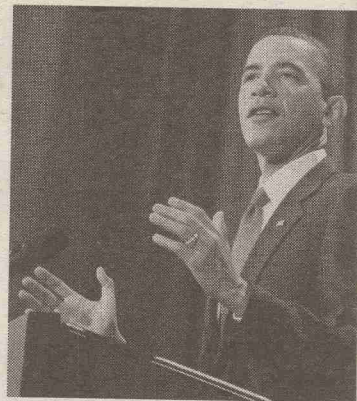
①普天間の代替滑走路は、九州の新田原、鹿屋のいずれ

かの自衛隊基地を利用。

②海兵隊移転

に伴い、九州地区の自衛隊を含む日米兵力の再編を行なう。

③普天間は完全返還されるが、有事に使用するため機



米国防総省は「辺野古」を強く要求した

能を維持し、即時対応する部隊をローテーションで沖縄に常駐させる。

この案に沿って日米合意を目指してきた者から見れば、訓練を県外の自衛隊基地に移転するという部分は「腹案」通りである。確かに「辺野古」さえなければ、満点ではないにしても「腹案」で決まった」といえる内容ではあった。

しかし、多くの国民にとっては、普天間問題の一番わかりやすいポイントは、代替滑走路の場所である。

「腹案」では、通常は新田原もしくは鹿屋を使い、有事には現在の普天間飛行場を使用するという考え方をしていた。それが「辺野古」となっている。

「新聞が書いた『現行案回歸』というのは嫌がらせの誤報だが、『辺野古から変更できなかった』と国民に見られるのは仕方ない内容だった」(民主党議員)

というのが妥当だろう。ところが、関係筋はもう



覚悟を決められない首相